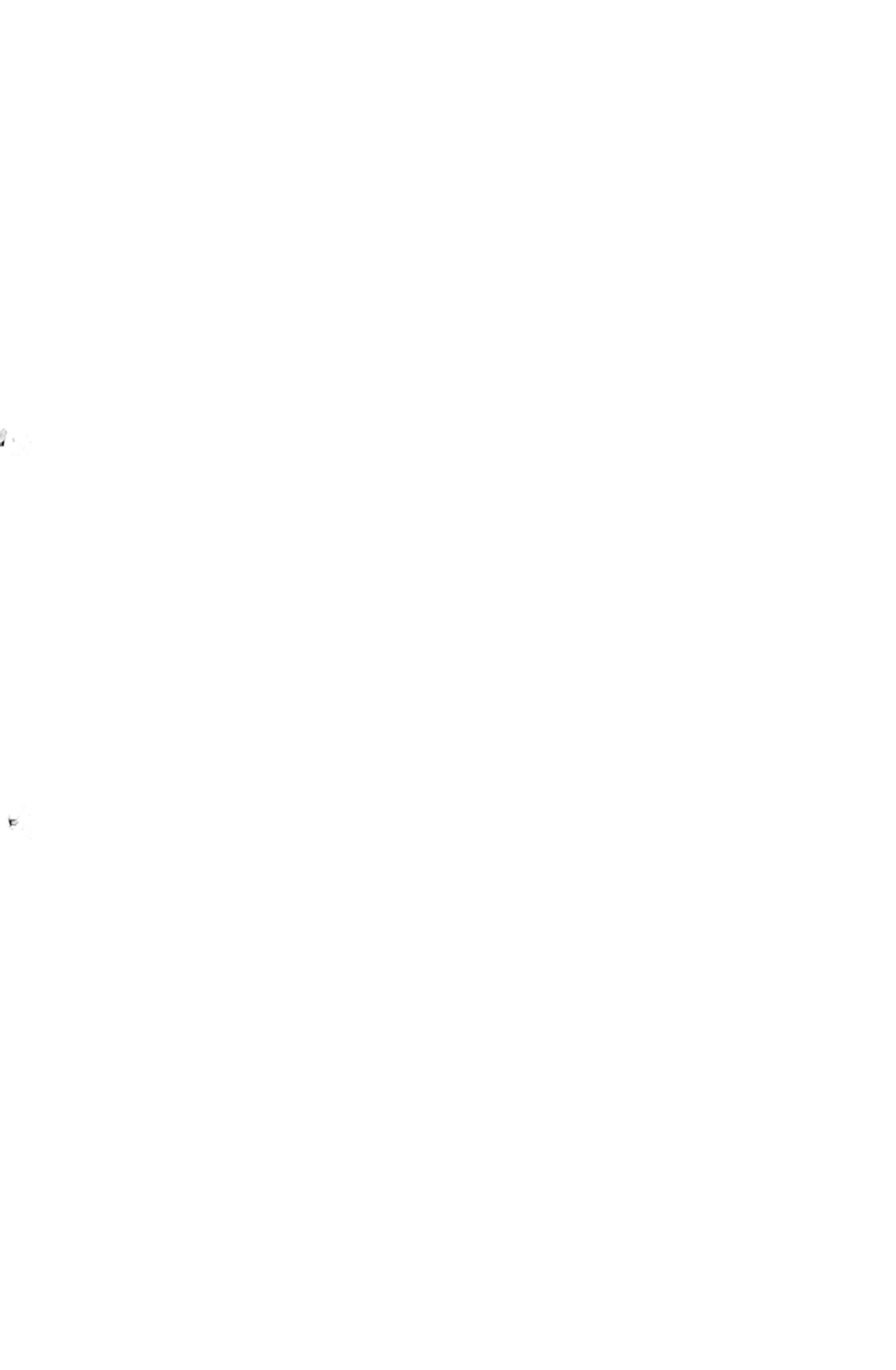


第十三回全国婦人会議開会式記念講演

「文化と生活」

「会議の主題にちなんで」

評論家 笠 信太郎



この度の全国婦人会議の主題は大変に大きく、そして非常にむづかしいものであります。生活と申しますと、生きている風どもの一切合切という感じであり、文化というのも、私たちをして生甲斐あらしめるもの、そのために創り出す一切のそのどというふう
に考えると、まるで取りとめがありません。特に私は、学問が浅いので、この会議の主題にちなんで何かいえというお話がありましたとき、全く当惑いたしました。

しばらく考えておりました末、ついに私は、こんどの会議にこの問題についてお考えをお出しにはった皆さんの所感文に、すがるうと思いつきました。

大変ずるい話であります。本日ここに全国の応募者約三千人の中から選ばれて御出席になつてゐる六十名の皆さんの文章が整理されるのを待つて、それを全部、改めて読み
こいたできました。

そして、その中から、生活とは何であるか、文化とは何であるか、そしてこの二つの言葉のもつ内容は、実際の中では、どういうふうにからみ合っているのか。それを、皆さま方に教えていただいたのであります。

それにもとづいて、ここに多少の感想を申上げようとするのでありますが、まるで先生たちのもつてゐる虎の巻を先によんでおいて、何とか答案を書こうとしている生徒のようなものであります。

しかし、私は、皆さまの文章と拝見して、ともかく大いに感動いたしました。一休男は何をしているんだといった感じさえいたします。

オーに、皆さま、実によく皆さまの身辺、周辺を見ておられる。一人の主婦として、あるいは、一人の母親として、一人の教師として、この目が大変鋭いのであります。実は私は、考えることよりも、見るこそ大切だと思つてゐるものです。

で、もし戦前におきまして、こういう所感文を募集いたしましたなら——私の想像であります——やはり立派な文章が集まつたであらうと思ひます。しかし、その文章は整つてはいても、書かれる方のすべてが、恐らく頭の中で考えられたことを書かれたらう。そして恐らく、学校で学ばれた智識にものすゝいて書かれたらうと思われまゝ。さらに、もう一つ付け加えますならば、多分、良妻賢母といった立場から、これを論じられ

たのではないだろうかと思ひます。

皆さまの所感は、これとは全く違つております。場合によるとその反対といつてもよろしい。ほとんど、捉われるところがない。少くとも、自分自身の眼を信じて、何ものに捉われまいと努力しておられることがわかります。これは、まったく戦後の新しい状況であります。私は、しばらく、文化ということ定義いたしません、こうした状況自体、日本の文化が明かに一進展をした一つの証拠だといつて差支えなさうに思ひます。

皆さま方の意見の中で、一、二、かなり共通であつて、しかも目立つものを最初に挙げてみたいと思ひます。

その第一は、文化、文化というが、文化とは一体何であるか、といふことが文化に対する疑惑を打出しておられます。

それは例え、こういうことです。「一町や五反の農家が、何十万円という耕うん機を買ひ込む、それを使える農期といへば、ほんのわずかなである。その息子は、バスで通え

るのに、オートバイで高校に通う。あまり見ているにマモはいのに、テレビを買い込む。これは、最近の農村にほとんどあまねく流行している傾向ですが、こんどは、こうしてかき出費に追われて、現金を得るために、一家の主人か、主婦が、どこか遠くへ出かぜぎに行く。そうになると、まず子供たちの教育に問題が起る。夫婦の間にも問題が起りかねない。これは農村が次第に都会化してきた現在、あちこちに見られるアンバランスですが、このアンバランスを鋭く指摘し、そうしていわば物質的文化が、ほんとうの文化を殺してしまおうとしているといった一面を、えぐり出しておられます。

この種のことと、「ニセものの文化」が横行しているのではいか、というふうに表現されているかたもあります。

そして同時に、「レジャーや消費文化の宣伝」に抗して、私たちはそういうニセものを見分けて、「そのごとの本物を見きわめる目」をもちたいと主張されている。また、ほかのあたは、「文化を取り入れるのに家庭生活や人間性を殺さぬようにしたい」といつておられる。

以上は、今の文化への疑惑を投げかけたものであります。

ましてこれは、造化製品のことばかりを意味いたしません。根深い社会慣習や、迷信や、流行にまかつて、けなげに対抗しておられる態度とも、共通のものがあります。

どこの一軒の家が小型自動車を買ひ込む。するとそれが、たちまち拡がる、たれのが出稼ぎに行く。すると、あつちにもこっちにも出稼ぎがはやり出す。こういった日本の社会、農村にも都会にも通じて見られる日本の社会の弱点に対して、ここに集り方々は、ほとんどが抗議をしておられます。場合によると、今の社会の「制喪」そのものの中で、おかしな点に対しても、これに敗けないで、対抗し、これを変えようと、動きかける勢いを示しておられます。

これは私、正しいと思います。

もし人間の最初の「文化」が、その文字の原語であるカルチュアとかクルトゥアとかの意味しております通り、耕すということ、「自然」にむかつてクワを入れて、そのを養育して生産する、作り出す、ということであるとしたまはらば、ここで皆さまがやつておられることは、その対象こそもう粗野な「自然」じゃなくて、ずっと進んできている人

間社会に、その制度に、その慣習に、その慣れきつてゐる考え方に、クワを入れて、そこから何ものか新しいものをクリエートする、作り出そうとされているわけでありますから、これは、まさしく「文化」を進めつつあるということができるのであります。

文化とは、そこにある資材や材料ではありません。その資材から新しいものをつくり出すということでありまじょうから、まず、その資材をどのようにに選択し、より分け、どう受け入れるか、というところに一つの重い意味があります。

それは、皆さまがたの中のだなたの言葉でいうところニセの文化しをふるい落とすというところでもあります。しかし、そのふるい落とし方が問題であります。

いろいろの電気器具がみな文化的な所産ではないとはいへません。しかし、これを受け入れるとき、受け入れる側に、まず、いろいろの条件があります。生活がまだ一般的に貧しくて、高価な電気器具を買入れることによつて、出稼ぎを必要とするというようなことにはなりますと、それは果して家庭生活としてきれいにバランスするものかどうか、電気器具に引ずり回されたりすることにはならないか、それを考えてみる必要があります。

しよう。

しかしまた一方では、ある主婦のかたがおつしやるには、電気器具などを用いるようにはつて、「四丘前にくらべると主婦の労働時間を三時間二十五分まできりつめることができるようにはつた」というのであります。同時に、そこから生まれた余暇を極めて有効に使っているという報告であります。これは、このかたの家庭に、ある程度の経済的なゆとりがあつたという条件によるものであります。この場合には、電気器具を取入れることによって確かに生活は文化的に一步を進められたということができようと思ひます。

こういう、バランス・アニバランスの考慮がこの場合は、たいへん大切であります。

と同時に、皆さまの所感文を通してみますと、皆さん方ご自身は、そうではないけれども、いまの社会にはほうぼうにひどいアニバランスが出ておつて、そのアニバランスが、むしろ生活に逆襲してきている様子があるがわかります。これが実際の現状であります。一般的な現実であります。

こういうことが、御報告によつてハッキリわかります。

これに関連して、いま一つ二つ、特にピカリと光っているような体験の報告を取り上げてみたいと思います。

たいていの農家ではいまでもやつてゐるやうに、井戸が家の外にありますので、雨がふつたり、雪がふつたりするときにも、灯をつけて、寒いところを、遠く離れた外に水くみに行かねばなりません。これは思うだに、大変つらい労働であります。ところが、ある農家の主婦であるかたは、カケヒの水からヒートを得て、落下式簡易水道を自分で作らうとされました。ところが近所がやかましい。自分のカラダを使えばいいものを、高いお金を出して、村中の人の注視と悪口を吞びながら、つくられました。でき上がったら、もう何の弁解も必要ではなかつた。工事を手伝ってくれた人たちの家からまず順々に、この簡易水道はたちまちにして村中に普及して、いまでは村のどの家でも蛇口一つひねることで、水汲みの重労働から解放されたと報告されています。

私は、これなどは村の現状にふさわしい選択であり、小さなことのようにですが独特の

創造であると思います。また、そのための一つの積極的な行動であります。生活の眞只中から文化の前進に貢献されたと由してよいと思います。

そう一つ――

本土からは今の所方にある一つの島で、地図の上では聚しにくいほどの小島ですが、大変おくれた、ハブやハエも多く、水道も便所もまだ共同使用ということですから、およそ普通の想像を越えた假地であります。そこへ、主人と赴任されたかたが、懸命の努力をなさるが、なかなか島の人たちとうまく折合いがつかぬ。これは長い間の島津藩の庄政のしりりで、^{ヤマト}「大和んちゆ」といつて、本土人に対して、警戒の念が強く、いつも反抗の気構えを島の人々がもち、その辺が思うようにいかなかったのです。このかたが、この大変おくれた島にある唯一最大の誇りで、長い伝統をこつ^{つむぎ}袖織りを自分でも始められたそうです。不思議なことに、袖を織ることで、急にその人たちとの間に親近感と信頼感が聚まってきました。「相互信頼の鍵がここにかくされてあった」とそのかたは書いておられます。

私はここを読んだとき、いささかハツといたしました。一つの文化が、人間の間を取りもつたのです。島の人たちが非常に大事にしている貴重な文化に対して、身をもつてされた理解が、こうした人間的な心の通いを生んだものだと思います。

この話は、文化とは何であるかということと、端的に示しておりますと同時に、いろいろと深い暗示を与えているように思えます。

× × ×

さて、こうしたお話を長くつづけることができないのは残念であります。

というのは、ここに出席の皆さまは、以上申し上げましたように、いまの日本の社会に進行中の一つの大きな変化の過程に、けなげに対処して、一せそのとホニそのを見分け、条件に合うものと、合わないものを選別し、吸収し、そこに自主的なもの、自分のからだにぴつたりするものを創り出そうと努力されているわけですが、一般的にはどうかというと、まだまだ低い生活の水準に打勝てないでいると同時に、はんらんする流行や宣伝、激しい競争としている企業のあつかましい商業主義にまけて、混乱が疑いてい

まず、これが問題であります。ことに農村の一部では、家の中に荒しがなく、主婦たちはみんな腰をかがめて仕事をしているのに、さきほど申しましたようにテレビは買い込んでいるといった始末で、全く親子の合わない混乱が起っております。都市の団地などでは、シジャーばかりだというばかりでなく、一般に欲望が自分たちの家計とは関係なく高まり、そのために共稼ぎがやめられぬとか、あらたにパートタイマーに迫られたりいたしますが、その子供たちの世話とする準備は、社会的にはできてない。こうしてお互いに文化を求め、お互いにひとのまねをすることによつて、その不調和から、何やら、いよいよ気げわしい気持ちになる。しかも、お互いにまねはするが、何かでお互いに協力しようとはしない。お互いに手をつなぐとする社会的な意識は全つてとぼしい。何か、チグハグで、結構「落つけない」というのが、一般の目立つた状況であります。皆さまの中のどなたかが書いておられますように、「買つても買つても次々に買わねばならないような現在の生活」、の「落つきのなさ」がそこにあります。

この落着きのなさ、何かを求めて、しよつちゆう爪立つていたり、何かわからぬけれ

ども、いつも何かを待っているといった気分は、これは、戦後の社会の一つの特徴でもありすぎるが、よくよく考えてみると、これはまた、この日本と日本人の今日までの長い間の在り方の中にある、一つの極めて主目すべき特質であり欠点であります。

私は、はつきりと自分自身のものと確信される文化をそつということは、非常に重要なことで、国民の自信と落着きは、そこから生まれてくるのだと考えております。しかし、国の歴史的な地位というか、運命というか、その国民自身では容易には変えることのできないような回り合わせがあります。そしてそれは、この文化にも、ついて回ります。

日本人は、運命のいろいろな仕事からいつて、すこぶる能力をもちた国民だということが、私はいえるように思うのですが、しかし今日までまだ十分にその自分の能力を發揮できなかったように思われます。

例えば、漢字という形骸文字を輸入して、そこから、万葉がナを作り出し、また純粋な表音文字であるカナを作り出して、正統に自分本来の表現方法を確保したということ

はどを考えますと、もし日本人が、その能力を本当に発揮するばら、大変な仕事ができるということの意味いたしていると考えます。

しかし、日本人はそのチャンスをもたなかつたようであります。歴史の経過は、一つの運命でありまして、日本はいつも、その周辺の外国で先に発展した文化を受入れるような回わり合わせになつておりました。奈良朝時代には唐の最盛期の文化を、鎌倉時代には宋の文化を、徳川時代には明・清の文化を、それぞれ生きたまま輸入することになりました。それも、生きた人間が、向うえ留学したり、向うの生きた人間がこちらにやつてきたりして、ナマのままの文化が多くは直接に入つてきております。このことは、自分自身の文化を、根本から育ててゆくだけの、時間的にも、気分の上でも、ゆとりのない状態に運命的におかれていたということでもあります。

明治になつては、それが一層激しくなつて、西欧諸国やアメリカ文化が、時を移さず次から次へと、息をつくまもなく、これまた生々発酵とした生きたままの形で入つてまいります。こうなると、自分のものを作つているにまなどはまったくないことになります。

面白い例を一つ取上げますと、徳川後半期に日本で盛んにはやつたあの南画をご覧になると、みな中国の風景であります。日本にはない突こつたる山が重なり合い、その下を溪流が流れておつて、そこにかかつてゐる橋は中国風の橋で、その上と中国の老人がツエをついて獲つてゐるとか、あるいはこれまた日本にはありそうもない高い崖の上に作られた小さは中国風のあづまやの中で、これまた中国の老人が閑談をやつてゐるといつた風流な画。おそらく、これを画いた人には一度も中国に行つたこともない画家が多かつたろうと思われませんが、それが画をかくということになると、こういった画をかくて一向に不思議ともせず、平気でおりました。そして肝腎の日本の田園風景をこうした方式で画いたものはまことに少いのであります。

これは自分の目でみたものではなく、一つの中国風な觀念で絵を画いたといつてもよからうと思ひます。

ところで、明治にはつゞ早々、さすがに、こういう画は面白くないという南画排斥の新しい運動が起りました。岡倉天心などの運動であります。そこで、こんどは油画をか

く人がだんだん多くはつてくるのですが、その多くはフランシスの印象派を学んだものであります。この日本の洋画を見て、イギリスの詩人ブランデンスンが——ブランデンスンは日本に大変理解をもつ詩人であります、もう十年ほど前に日本にやつてきましたときに、申しましたことが面白いのです。

こんなことをいいました。

「日本人はほんとに画がうまい。どこの小さなレストランに入つても、印象派風の画の一つや二つ、かかつていないということはない。しかし、その画をよくみると、それは印象派の画というよりは、フランシス印象派の印象である」と、こういうのです。ものを写生したものではありません、印象派を写生したものだという意味でありましょう。そこで、ブランデンスン、言葉をついでいうには「絵かきさんたちよ、しばらく絵筆をおいて、あなたが画こうとしている対象を、あなたの目で、よくよくご覧なさい」。

こういつたのです。これは大変な皮肉でもあります。自分の目で画いたものではなく、印象派の目で画いているということでありますから、どうもこれは、徳川末期の南画か

さが、南西をわいていた姿勢と同じようなところが、ないでもないのです。

これは、外国の文化を取入れたというよりは、外国の文化を頭から引かぶつて、自分というものが夫くなりそうは姿であります。

明治になつてから西洋の文物の流入は、非常に急速で、文字通り応接にいとまがなかつた。むしろ、二んはに早く、二んはにうまく、西洋文化を消化したその能力を評価すべきだとも思われるのでありますが、しかしとにかくその結果は私達は、自分で直接にものを見、社会を見て、そのごとの根本から自分でやつてみるという、ゆとりを持つことができなかったのです。そこで長い時間と根拠をかけ、そのごを根本から掘り起して、前人未踏の大きな仕事をしたというものが、遺憾ながら日本人には欠けております。よく百尺竿頭一步を進めると申しますが、百尺の土台があると、その上に一步を進めることは案外うまいのですが、百尺そのものは自分で作り上げようとしなないのです。日本の現代の文化には、深い根底が欠けております。学者たちも、丸善の棚に並ぶ外国書を競って買つてゆくことに忙しかつた。目今自身で根本からそのを見、考えるということが少かつたのです。

この戦後ですら、多少の発明、発見はありました。多くは外国のパテントを輸入して、あの経済成長をやつたようなものであります。

この状況は丁度、現在の日本の農村に都会のほうから電気がマヤ冷蔵庫その他の電氣器具がどしどしはいつてくる有様と、よく似ております。極端な場合には、テレビは近所への見栄で、実際には飾りになつてゐるといつた状況であります。むろん、やがては調子なとれるようになりましょう。しかし、それはちょうど明治の初期、中江兆民などによつて「自由」という觀念が輸入されたときの調子に、よく似たものがあります。そのころまで、日本には「自由」という言葉すらはなかつたのであります。自由、不自由という言葉はあつても、いま皆さまが用いておられるようは、社会的、政治的意味の「自由」という言葉はなかつたのです。何しろ、この「自由」に当る事実がなかつたのですから。それからいまや百年ですが、「自由」は長いあいだ忙しい農家のテレビ同様、飾りそのものだつたわけです。自由ばかりではありません。ありとあらゆる思想、制度、法律戦争のやり方に至るまで、次から次に、新しいものが、はいつてくるのですから、国民

はいつても何かを外に期待し、何かを得つてゐる気持ちになります。それでは生活はなかなか落着けなひのです。いまの農村が、落つきを失いがちであるのと、よく似ております。この特徴は、大きくは国民、小さくは個人々に及んでおります。

この点が、自分の文化を築いてゆくに當つて、参考にすべきお手本というものと殆んど持つてゐなかつた西洋の諸国、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアなどの、二千年間の発達と、根本的にめぐり合せがちがあります。かりに、この連中が、参考にしたものがあつたとすれば、ギリシヤ、ローマの古代文化ですが、それはもうとつくに皆な死んでしまつておつて、いわば世の中から掘り起すようなものですから、そこに自分たちとの間に巨難があり、したがってそれを参考にすることも、十分のゆとりがありません。そして任事ほとんどすべて、自分の力で開闢してゆくよりほかはなかつた。千年のあいだ、ちやうど、自分のデザインで、煉瓦を一枚一枚積み上げて家を建てていつたようなもので、いつの時代でも、いまでも自分が足もとにおいた煉瓦が、一ばん高いところにあります。その上につて見衰すと、遠くに見えるよその家は、はるかに低いところにあつて、自分の建てようとする家のお

手本にはなりません。こうして数世紀のあいだ、お手本をもちずに相互積みやりながら今日に至っているのでありますから、頼むのはただ自分自身ということになります。文化がそのまゝ自分の生活と一致していると申してもよさそうであります。

これは一般的に心の落着きをもちます。私は、眞実の文化とは、そのようなものであろうと思います。その上に、自分の気持を安心して乗せていられるようなものであります。

さきほどの細^{ツギ}織の上に、その島の人たちの心はやすらげていたのであります。そこで、紺を一箱に載るといふことの中に、「相互信頼の鍵」がみつかったとおっしゃるのは、その辺のところを、よく物語っております。

外からの文化が、吾々の生活圏の中にはいつてくることは、致し方ないというよりは、むしろ有難いことであります。その意味では、この日本は、ちやうど地曳き網の底みたいに、ありとあらゆる文化が古くから今日まで、そこにどまつて、網の底はふくらんでおります。今後、はいつてまいります。それをどう受止めるか、その受止め方に、

私たちの賢明と知恵と意志がはたります。しかし、できることならば、さつきの落下式簡易水道のように、しかしながら、それがもつと大きな、世界的な規模で、私たち日本人の創意がはたらいした結果として、根本的なものが生み出されてきますならば、それこそいちばん願わしいのであります。こうした自主的な活動の中で、自分自身を覆りとする活動の中で、はじめて生活の着着きが出てまいりますし、心の平安が出てくるのだと思えます。たいへん大まかな話ですが、これが私どもの今後の心がけであろうと考えます。短い話にもかかわらず、大変ごたごたいたしましたして、さぞお聞きづらかつたろうと思います。どうか、この一兩日、皆さまのご勉強を祈りまして、二二にご清聴を感謝すると共に、所感文の皆さまに特に敬意を表する次第であります。